

論文

中国語における成語の統語的振る舞いに関する考察

池田 晋

〔抄録〕

中国語の成語は、統語的振る舞いという点では日本語の成語や諺に比べてずっと活動的であり、学習者にとっては自発的にその用法を修得することが困難である。本研究では、名詞フレーズの形を取る成語（名詞性成語）を考察の対象とし、それらが述語や連用修飾語になる現象について考察をおこなった。サンプルとして取り上げた33語の名詞性成語を名詞的な振る舞いに留まるものと述語・連用用法を具えるものに分け、分析を加えた結果、述語・連用用法を具える名詞性成語はほぼ全てが対偶形式をとり、「汎説（大河内1997）」という意味的特徴を持つことが明らかとなった。汎説の意味は、名詞性成語が述語・連用修飾語として機能する上で極めて重大な役割を担っている。

キーワード：名詞性成語、統語的振る舞い、対偶形式、汎説

1. はじめに——成語教材の現状と課題

成語は複雑な意味を4字という短い形式で簡潔に伝えることのできる表現形式であり⁽¹⁾、その修得は中国語学習者が中上級へとステップアップしていく上で、避けて通ることのできない関門である。現代中国語に限ってみても数千語近い成語が常用されていると言われ、それらの意味や用法を1つ1つ正しく修得するには膨大な労力を要する。成語をマスターするための第一歩は何よりもまずその意味面の特徴を正確に把握することであり、これまでの中国語成語教材でもこの点を記述することに重点が置かれてきた。[1]は一般的な成語辞典の記述であり、語釈、用例、類義成語、反義成語、意味的制約および褒貶義の有無などが細かく説明されている。

[1] 西装革履

【注音】 xī zhuāng gé lǚ

【释义】革履：皮鞋。身穿西装，脚穿皮鞋。形容穿着整齐体面。

【例句】王教授～，潇洒地向会场走去。

【近义】衣冠楚楚（见971页）

【反义】不衫不履（见74页）

衣衫褴褛（见972页）

【连用】西装革履，风度翩翩。

【用法】①多指人的装束。②含褒义。（《学生实用成语大词典》：865）

このような成語辞典の記述内容は母語話者にとっては不足のないものと思われるが、非母語話者の立場から見れば、必要な情報が十分に網羅されているとは言い難いところがある。例えば、[1]では用例として“王教授西装革履〔王教授はスーツ・革靴のパリッとした装いだ〕”という文が挙げられており、そこでは“西装革履”が動詞の助けを借りず、そのまま直接述語として用いられている。いくら語釈で“形容穿着整齐体面〔身なりが整っていて立派であることを形容する〕”と説明されているとは言っても、“西装革履〔スーツ・革靴〕”という名詞を2つ並べただけのようなものが直接述語になれるという事実は、非母語話者にとっては容易に予測ができないものであろう。実のところ、文中でどのような成分になり得るかという点において、中国語の成語は日本語の成語や諺と比べてより活動的であるように思われる。“西装革履”は、述語用法のほか、連用修飾語としても用いられるが、これも非母語話者の感覚からは予想外に映る（“他匆匆忙忙，西装革履地出去。〔彼はいそいそと、パリッとした格好で出かけていく〕”）。明示的な解説を与えられることなしに、学習者自身が自発的に1つ1つの成語の用法に気づき、修得していくことには明らかに困難がある。非母語話者である中国語学習者が成語を覚え、正しく使用するためには、一般的な成語辞典の記載内容に加えて、その語が文中で如何なる位置を占めることができるか——即ち、成語の統語的振る舞い——についても適確な解説が与えられる必要がある。

残念ながら、従来の成語教材や成語研究は、成語の統語的振る舞いという側面についてほとんど注目を払ってこなかった。成語や諺以外の一般的な語について言えば、例えば中国の代表的な漢語辞書である《現代汉语词典》が第5版（2005年）以降、各語について品詞標示を記載するようになっており、学習者はその品詞標示から1つ1つの語のおおよその統語的振る舞いを予測することができるようになってきているが、成語についてはそもそも統語的振る舞いについて意識的に分析をおこなった研究自体が少なく、思うような成果が挙げられていないというのが現状である。このような事実に鑑みれば、今後の成語研究においては、まず何を措いても、1つ1つの常用成語の用例を精査し、それらの統語的振る舞いを網羅的に記述することが必要となってくる。そしてその上で、成語の内部構造や意味と統語的振る舞いとの間にどのような関連性や傾向性が見られるかを明らかにすることが求められるであろう。本稿はそのような試みの第一歩として、名詞性フレーズの形を取る成語（以下、「名詞性成語」と称する）を対象

にそれらの統語的振る舞いに関する分析をおこなってみたい。

2. 先行研究

現状の成語教材、成語研究の多くは今なお前述のような状況に留まっているとはいえ、これまでの研究で成語の統語的振る舞いについて全く言及がなかったわけではない。例えば、馬国凡1978は成語を多面的に考察した専著であり、統語的側面についても一定の紙幅が割かれている。だが、「成語の中には主語になるものもある；述語になるものもある…」といった形の説明がなされるのみで（同：200-209）、1つ1つの成語の統語的振る舞いを個別に記述する必要性が明確に意識されているとは言い難い。

この点について、はじめて本格的に問題提起をおこなったのは陸・馬1985：3であり、個々の成語の統語的振る舞いについて未解明の問題が数多く残されていることを指摘している。周国光2002は、陸・馬1985の指摘を受け、実際に成語の統語的振る舞いの分析に取り組んだ先駆的な論考であり、“他这样做是……的。[彼がこのようにしたのは…だ]”と“他这样做是……。”の2つの構造を元に、成語の意味と統語的振る舞いの関係について論じている⁽²⁾。

本研究と最も近い問題意識をもって成語研究に取り組んだと思われるのが、夏秀文2009である。夏秀文2009は対外漢語教学の観点から、成語の統語的振る舞いを記述する重要性を指摘し、その試みとして41の常用成語の統語的振る舞いを分析している。夏秀文2009：15-17は、各成語は文中で複数の位置を占め得るが、そのうち最も出現数の多い機能を典型用法とみなすことを提案する。例えば、“百家争鸣”は定語（連体修飾語）として用いられる頻度が最も高いため、これを典型用法とする定語性成語だと見なされる。各成語の統語的振る舞いを個別に記述しようとした点で意義深い論考であると言えるが、意味や内部構造と統語的振る舞いと的相关性については分析が及んでおらず、この点について更なる検討の余地が残されている。

成語教材に関して特筆すべきなのは、日本で近年出版されたものの中に、上述の問題意識を踏まえたとと思われるものが徐々に増え始めていることである。例えば、郭・郭・操2018は、現時点において個々の成語の統語的振る舞いについて最も詳しい解説が与えられている教材である。郭・郭・操2018には、個々の成語の最も典型的な用法が何であるかや述語になる際に“的”を伴うかなどの情報が具体例とともに取り上げられており、学習者にとって参照価値の高いものとなっている。このほか、沈・紅粉2021も、各成語がどのような統語的振る舞いをするかという点が強く意識された教材である。従来の成語教材では各語の文例が1例ずつしか挙がっていないことが常であったが、これらの教材では述語用法、主語用法、連体修飾語用法…などと明示的な形で複数の用例を列挙するよう工夫がなされている。

3. 調査

3. 1 調査対象

成語は主に4字で構成されるが、構成要素となる各字は基本的には伝統的な中国語の統語規則に従って組み合わせられるため、4字の成語全体としては形式上はフレーズないし節と同様の形を取るようになる。例えば“西装革履”は名詞“西装”と名詞“革履”の並列構造であり、全体としては名詞性フレーズの形を取っている。“叶公好龙”ならば、固有名詞“叶公〔葉公〕”が主語、VOフレーズ“好龙〔竜を好む〕”が述語となり、全体としては節形式に相当する。

成語学習の難点の1つは、まさに先の“西装革履”がそうであったように、内部構造と実際の機能との間に大きな隔たりが生じ得るということである。即ち、単純な内心構造の4字フレーズとして理解できないものが少なからず存在する。本研究の目的は、そのような予測困難な統語的振る舞いを考察し、その原因の一端を解き明かすところにあるが、その試みの第一歩として、本稿ではまず「**構造的には名詞性フレーズの形を取るものが、統語的に述語や連用修飾語として機能する**」ケースに焦点を絞り、分析を進めていくことにしたい。

本稿では調査対象として、中国教育部中外语言交流合作中心により2021年に刊行された《国际中文教育中文水平等级标准》の語彙表（一～九級）に掲載されている成語を抜き出し、更そこから名詞性フレーズの形を取るもの33語を抽出した。抽出した33語は以下の通り。

[2] **【偏正構造（連体修飾語＋被修飾語）】** 不正之风[2993]、当务之急[3317]、后顾之忧[1589]、可乘之机[688]、一技之长[577]；美中不足[316]⁽³⁾

【並列構造】 暴风骤雨[206]、诚心诚意[537]、粗心大意[283]、大街小巷[1724]、大模大样[282]、大同小异[555]、风餐露宿[318]、各式各样[1665]、古今中外[1232]、欢声笑语[618]、七嘴八舌[499]、奇花异草[127]、千方百计[5632]、千家万户[2360]、千军万马[585]、亲朋好友[1208]、全心全意[4471]、四面八方[2285]、天经地义[681]、五颜六色[882]、五花八门[1259]、一模一样[1547]；千钧一发[337]、异口同声[788]、来龙去脉[713]

【重畳形式】 家家户户[1178]、形形色色[1569]

33語のうち偏正構造を取るものが6語あり、内部構造としては「2＋之＋1」と「2＋2」（美中不足）の2パターンがある。並列構造を取るものは25語あり、これらはいずれも「2＋2」という内部構造を取る。このうち前2字と後2字が類義ないし同類の関係になっているものが22語、前2字と後2字が対立的内容ないし反義の関係になっているものが3語ある。ほかにAABB型の重畳形式を取るものが2語見られた。

これら33語の成語について、北京大学中国语言学研究中心语料库（CCLコーパス）を用いて検索をおこなったところ、それぞれ[2]で示すようなヒット数が得られた（〔 〕内の数字が

ヒット数)。本稿では以下、33語についてコーパスから得られたこれらの用例をもとに分析を進めていくものとする。

3. 2 コーパス調査

CCLコーパスの用例をもとに、各成語が文中において「主・目（主語と目的語）⁽⁴⁾」「連体⁽⁵⁾」「述語」「連用」「独立⁽⁶⁾」「補語」の位置に生起するか否かについて調査をおこなった。結果は表1の通りである。表中の「○」はその用例が幅広く観察されたことを、逆に「×」は用例が観察されなかったことを示す。「△」は極めて少ないが、僅かながら用例が検出されたことを示す。ただし、その頻度はヒット数全体に対して1%程度かそれ以下に留まるため、以下では一律に「基本的には成立しない」ものとして扱うことにする。

表1 名詞性成語の統語的振る舞い

	主・目	連体	述語	連用	独立	補語
不正之风	○	○	×	×	×	×
当务之急	○	○	×	×	○	×
后顾之忧	○	×	×	×	×	×
可乘之机	○	×	×	×	×	×
一技之长	○	×	×	×	×	×
美中不足	○	○	○	×	△	×
暴风骤雨	○	○	△	×	×	×
诚心诚意	○	○	△	○	△	×
粗心大意	○	○	○	○	△	×
大街小巷	○	○	×	○	△	×
大模大样	×	○	○	○	×	×
大同小异	×	○	○	○	○	△
风餐露宿	○	○	○	○	○	×
各式各样	×	○	○	×	△	△
古今中外	○	○	×	×	○	×
欢声笑语	○	△	○	△	○	×
家家户户	○	○	×	○	△	×
七嘴八舌	△	○	○	○	○	×
奇花异草	○	△	△	×	○	×
千方百计	○	○	○	○	○	×
千家万户	○	○	×	×	○	×
千军万马	○	○	×	△	△	×
亲朋好友	○	○	×	×	△	×
全心全意	○	○	○	○	△	×
四面八方	○	○	×	△	△	×
天经地义	○	○	○	△	○	△
五颜六色	○	○	○	△	○	○
五花八门	○	○	○	△	○	△
形形色色	○	○	○	△	○	△
一模一样	×	○	○	△	△	○
千钧一发	○	○	△	△	△	×
异口同声	×	○	○	○	△	△
来龙去脉	○	△	×	×	×	×

4. 具体例

4. 1 名詞相当の機能しか持たない成語

[2]に挙げた33語の中には、述語や連用修飾語として振る舞えるものもあれば、主語・目的語や連体修飾語にしかならず、名詞性フレーズの域を出ていないものもある。[3]ではまず後者、即ちほぼ主語・目的語・連体用法のみで、名詞相当の機能しか持たない名詞性成語をまとめる。その成語にごく僅かに述語または連用用法が見られたものには右肩に「△」を付しておく。

[3] 名詞相当の機能しか持たない名詞性成語

甲：ほぼ主語・目的語・連体修飾語のみの名詞性成語(10)

不正之风、后顾之忧、可乘之机、一技之长、暴风骤雨[△]、亲朋好友、四面八方、千军万马[△]、千钧一发[△]、来龙去脉

乙：主語・目的語・連体修飾語に加えて、独立用法が常用される名詞性成語(4)

当务之急、古今中外⁽⁷⁾、奇花异草[△]、千家万户

以下に上記成語の目的語用法、主語用法、連体用法、独立用法の具体例を挙げる。

- [4] 这个“天天市”的出现，解除了当地农民种菜的后顾之忧。（《市场报》1994年）【**目的語**】〔この「毎日市」の出現は、現地農民の野菜作りの後顧の憂いを解消した。〕
- [5] 人们如潮水般地从四面八方涌来，每天达6-7万人。（《报刊精选》1994年）【**目的語**】〔人々が潮のように四方八方から湧き出し、毎日6-7万人に登った。〕
- [6] 这一阵暴风骤雨，把个苏州城打得落英缤纷，吓得苏州公园里的花工也不敢种花。（《作家文摘》1993年）【**主語**】〔今回の暴風雨は、蘇州の街を散々に打ちこわし、蘇州公園の園芸職人も驚きのあまり花の栽培ができなくなるほどであった。〕
- [7] 当年汉代骠骑将军霍去病的千军万马曾在这里披挂戎戈，血洒疆场。（《报刊精选》1994年）【**主語**】〔当時漢代の驃騎將軍であった霍去病の軍馬はかつてここで武器や防具を身にまとい、戦場を血で染めた。〕
- [8] 在这千钧一发的危急时刻，湖边的游人一个个挺身而出。（《人民日报》1994年）【**連体**】〔この危機一髪のとくに、湖のそばにいた遊覧客が1人また1人と危険を顧みずに駆け寄って行った〕
- [9] 为了丰富自己，他潜心读书，古今中外，诗歌小说，正传野史，无不披阅。（《人民日报》1994年）【**独立**】〔自分を豊かにするために、彼は読書に没頭した、古今東西、詩歌小説、正伝野史と読まないものはなかった。〕

[3]に挙げた14語に最も幅広く見られるのは目的語（動詞か前置詞かを問わない）となる機能であり、いずれの語を見ても目的語となる例が相当数に上る。このことは14語中13語に当てはまる。“千钧一发”のみは目的語ではなく、連体修飾用法の数が最も多く、[8]のように“之

际”や“的时候”など時間を限定する用例が大量に観察される。

4. 2 述語・連用修飾語用法を持つ名詞性成語

前節で挙げた14語以外の残る19語は全て、述語か連用のいずれか一方もしくはその両方の用法を持つ。以下、述語用法のみを持つ名詞性成語(丙)、連用用法のみを持つ名詞性成語(丁)、両方の用法を持つ名詞性成語(戊)ごとに列挙する。丙丁のうち、ごく僅かながら述語用法、連用用法が観察された語には、右肩に「△」を付した。

[10] 述語・連用修飾語用法を持つ名詞性成語

丙：述語用法を持つ名詞性成語(7)

美中不足、各式各样、欢声笑语[△]、天经地义[△]、五颜六色[△]、五花八门[△]、形形色色[△]

丁：連用用法を持つ名詞性成語(3)

诚心诚意[△]、大街小巷、家家户户

戊：述語用法と連用用法を持つ名詞性述語(9)

粗心大意、大模大样、大同小异、风餐露宿、七嘴八舌、千方百计、全心全意、一模一样、异口同声

ここでは丙丁戊から1語ずつ取り上げ、複数の用法の具体例を挙げておく。

- [11] a. 纵观本届评奖, 也有不少美中不足之处。(《人民日报》1996年) 【連体】〔今回の評定を通して見ると、玉に瑕なところも少なくない。〕
- b. 他说比赛在室外举行显得有些美中不足, 室内场地更能发挥出速滑明星的水平 and 风采。(新华社2003年2月份新闻报道) 【述語】〔試合が室内でおこなわれることはいささか玉に瑕だと感じられる、室内競技場のほうがよりスピードスケート選手のレベルや風格を発揮することができる、と彼は言った。〕
- [12] a. 但是, 他也知道她提的是诚心诚意的建议。(《作家文摘》1995年) 【連体】〔しかし、彼女が誠心誠意の提案をしたということは彼にも分かっている。〕
- b. 虽然现在还有缺点, 但我们还在诚心诚意地努力, 争取在短时间内与国际标准接轨。(《人民日报》1996年) 【連用】〔今は欠点があるとしても、私たちはなお誠心誠意努力を続け、短期間のうちに世界標準に肩を並べられるようにする。〕
- [13] a. 那时, 风餐露宿是我们的休闲, 八小时的上岗, 才是我们真正的内涵。(《人民日报》1995年) 【主語】〔当時、野外の食事や野宿は私たちの娯楽であり、8時間の歩哨こそが、私たちの本当の意味であった。〕
- b. 他和几个同学一起来到戈壁, 风餐露宿了20多天, 挣足学费重返校园。(《报刊精选》1994年) 【述語】〔彼は数人の学友と共にゴビ砂漠にやってきて、20数日間の野外生活を過ごし、学費を稼いだ後で再びキャンパスに戻ってきた。〕

- c. 她千里迢迢、风餐露宿来首都求医，多不容易！（《报刊精选》1994年）【連用】

〔彼女は遠路遙々、野宿を重ねて首都まで医者を訪ねてきたのだから、どれほど大変だったことか！〕

次節では以上の調査結果に基づいて分析を進めていく。

5. 分析

ここでは今回考察対象とした33語について、統語的振る舞いに関与的、あるいは少なくとも一定の影響を及ぼすと思われる要因としてどのような点が指摘できるかを検討してみたい。

5. 1 偏正構造における“之”

第一に、極めて顕著な傾向として、偏正構造を取る名詞性成語のうち、構成要素に“之”を含むもの（「2+之+1」の構造を持つもの）は名詞的な振る舞いにとどまりやすいということが指摘できる。今回考察対象とした“不正之风”“当务之急”“后顾之忧”“可乘之机”“一技之长”の5語はいずれも主語・目的語用法か連体用法のみしか持たず、その他は僅かに“当务之急”に独立用法が観察される程度である。なお、今回の考察範囲ではないが、“惊弓之鸟”“燃眉之急”“前车之鉴”などについても同様の傾向が見られる。

“之”を伴うものが述語用法や連用用法を持ちにくい原因としては、「2+之+1」という構造が次節で述べる「汎説」の意味を表し得ないという点を指摘できるのではないかと思う。中国語の成語において汎説の意味は、対偶形式——即ち対称的な「2+2」の組み合わせ——を基礎として生み出されるものである。「2+之+1」はそのようなリズムからは逸脱するものであるために、結果的に単一の事象以上の意味を表し得ないのだと考えられる。次節で述べるように、汎説の意味は名詞性成語が名詞を超えた統語的振る舞いを獲得するうえで、極めて重要な役割を担うものである。その意味を表さない「2+之+1」タイプの成語が名詞の枠を超えられないのは、当然と言えるかもしれない。

5. 2 汎説

述語や連用修飾語として用いられる名詞性成語について検討するに当たって、まず念頭に置いておかなければならないのが「汎説」という概念である。大河内1997:15は、重畳形式や比況性連合構造など⁽⁸⁾、いわゆる対偶形式には、共通して「汎説」という意味的特徴が見られることを指摘する。例えば“老老少少”という重畳形式は単に老人と若者のみを指すのではなく、「老人・若者を含めたあらゆる年代の人々」と理解すべきものである。同じく“东家说长，西家道短。”という比況性連合構造は、「東の家の者が〇〇と言った」ことを事実として叙述しているのではなく、対句全体で「近所があれこれ言う」という一般的な状況を述べているのであ

る。いずれも形式上は“老”と“少”という属性2つ、“东家说长”と“西家道短”という事象2つしか出てこないが、それらはあくまでも代表例であって、その背後に存在する多様かつ多数の事物や事象を喚起するために持ち出されたものにすぎない。このように個別的な2つの事例を以ってより広範な事象を喚起することを、大河内1997:15は「汎説」と呼ぶ。

本稿で取り上げる33語に目を戻すと、その多くが重畳形式か比況性連合構造の対偶形式を取っていることに気付く。また意味の面を見ても、これらは基本的にはやはり何らかの点で汎説という特徴を感じ取ることができる（詳細は後述の議論を参照）。

[14] 対偶形式をとるもの

暴风驟雨、亲朋好友、四面八方、千钧一发、来龙去脉、古今中外、奇花异草、千家万户；各式各样、欢声笑语、天经地义、五颜六色、五花八门、形形色色、诚心诚意、大街小巷、家家户户、千军万马、粗心大意、大模大样、大同小异、风餐露宿、七嘴八舌、千方百计、全心全意、一模一样、异口同声

名詞的振る舞いに留まる名詞性成語14語のうち、対偶形式を取るものは9語であるのに対し、述語・連用用法を持つ名詞性成語は19語中、実に18語がこの形式を取っていることになる。対偶形式を取ることが即、述語的・連用修飾語的な振る舞いに繋がるわけではないが、反対に述語的・連用修飾語的な振る舞いが可能な名詞性成語はかなり高い確率で対偶形式を取っている、という事実がここから読み取れる。

対偶形式の成語が述語や連用修飾語としての機能を獲得する原因について、大河内1997の論旨を敷衍して考えるならば、それは汎説という意味を持つ『『具体的状況を生々しく（大河内1997:8）』写しだす』という特徴から説明することができる。例えば“欢声笑语”であれば、単に楽し気な話し声や笑い声の存在を述べているのではなく、ある場が大勢の楽しげな話し声や笑い声などに包まれているその状況を生き生きと写し出しているのである。汎説の効果によって状況をありのままに語るわけだから、当然、場面や様態の描写としてそのまま述語や連用修飾語になる資質を具えていたとしても不思議ではない。

勿論、対偶形式をとる成語の全てが述語・連用の機能を具えているわけではない以上、汎説の原因だけで33語の振る舞いを説明できるものではない。対偶形式の成語には基本的に「生々しく写しだす」意味が具わっているにしても、やはりその中で更に述語や連用修飾語として具現化しやすいもの、しにくいものに分けられるのである。次節では、対偶形式をとる成語のうち、どのようなものが、どのような意味において述語・連用修飾語となるのかを検討する。

5. 3 意味タイプ

成語の用法は各語ごとに個別の慣習が定着しているという側面もあるため、共通の規則によって予測できる部分は必ずしも多くはないが、それでも敢えて何らかの傾向性を読み取ろうとするならば、対偶形式を取る名詞性成語の述語・連用用法には、おおむね以下の5つの意味

タイプが存在するということが指摘できる。

①何らかの動作行為をおこなう際の動作主体の態度を表すタイプ

述語として用いられる場合は、主にその行為をおこなっている動作主体を主語に取ってその様態を描写する。連用修飾語用法の場合は後続する動詞が表す動作の様態を描写する。“欢声笑语”“诚心诚意”“全心全意”“粗心大意”“大模大样”にこのような用例が観察される。

[15] 在漫漫雪野中, 人们欢声笑语, 忘记了寒冷、疲劳和烦恼。(《人民日报》1993年)
[果てしない雪原で、人々は楽し気に語り笑い、寒さ、疲れと煩惱を忘れていた。]

[16] 标点者粗心大意, 随手一点, 就把本来很好理解的一则小故事弄得莫名其妙了。(《读书》)
[標点を付ける人が不注意にも、無造作に点を打ったことで、元々は分かりやすい話を意味不明にしてしまった。]

[17] 虽然现在还有缺点, 但我们还在诚心诚意地努力, 争取在短时间内与国际标准接轨。
[12b]

[15]はその場にいる人々の会話の様子が明るく賑やかな態度であることを述べるものである。また、[16]では動作主“标点者(句読点を付けた人)”が正にその句読点を付ける作業において不注意であったことが述べられている。また、[17]は自分たちが誠意ある態度をもって「努力する」という行為に取り組んでいることを主張している。

②ある動作行為の手段・方法を述べるタイプ

“千方百计”“风餐露宿”にこのような例が見られる。やはり述語として主語に立つ動作主体の状況を描くか、連用修飾語として動作行為を修飾するかのいずれかである。

[18] 我省各专业银行和非银行金融机构, 千方百计为重点项目筹措资金。(《报刊精选》1994年)
[我が省の各専門銀行と非銀行金融機関は、ありとあらゆる手段で重点プロジェクトの資金調達した。]

[19] 他和几个同学一起来到戈壁, 风餐露宿了20多天, 挣足学费重返校园。(=[13b])

[18]では資金調達のために「ありとあらゆる手段」を用いたことが描かれており、[19]ではゴビ砂漠での道中をどのように過ごしてきたかが描かれている。

ちなみに、「甲」に挙げた語のうち“千军万马”は「戦争の手段」として理解できそうにも思われるが、この語に述語用法や連用用法はほとんど見られない。実際のところは、上掲の[7]のように主語になったり、“统帅[率いる]”等の動詞の目的語として用いられることが多いことから、“千军万马”は手段というよりは、それ自体が意志を持った行為の主体として認識されやすいのではないかと推測される。

③ある類や集合においてそこに含まれる成員のバリエーションが豊富であることを表すタイプ

“各式各様”“五颜六色”“五花八门”“形形色色”にこのような用例が観察される。連用用法は持たず、専ら述語として、集合あるいは類としての事物を主語に取る。

[20] 現在市場上の国産羽绒制品五颜六色，琳琅满目，品种发展到数10个，花色有上百种。
（《市场报》1994年）〔現在市場の羽毛製品は色とりどり、逸品ぞろい、種類は数十個に増え、柄と色は100種ほどがある。〕

[21] 高收入者赚钱手法形形色色，令人眼花缭乱，莫衷一是。（《报刊精选》1994年）〔高收入者の稼ぎの手法は様々あって、目も眩まばかり、どれが正しいかは決められない。〕

[20]は国産の羽毛製品という類において種類が豊富で色とりどりであるさまを、[21]は金儲けの手法に様々なバリエーションが存在することを述べている。

これらと類似の意味を表しながら、述語・連用用法を持たないものとして“奇花异草”が挙げられる。“奇花异草”も確かに「珍しい植物のバリエーションが豊富に存在する」ことを表すものであるが、これは「珍しい植物」と事物の範疇を指定したうえで、その種類が豊富であることを述べているという点において、存在物の範疇を示さず、純粹に「種類が豊富」という意味のみを表す“各式各様”“五颜六色”などとは異なっている。“奇花异草”が述語・連用用法を持ちにくいのは、この点が強く影響しているものと推測される。

④ある範囲において同一の事象が普遍的に観察されることを表すタイプ

“七嘴八舌”“大街小巷”“家家户户”にこうした用例がある。“七嘴八舌”には述語用法も観察されるが、基本的には連用修飾語として動作行為を修飾する用例が多い。

[22] 21日上午，张超大街小巷地问，愣找不见兴广路9号，找不到医药保健器公司，找不到李俊影。（《报刊精选》1994年）〔21日の午前、張超は通りという通りで尋ね回ったが、なんと興広路9号は見あたらず、医薬保険器会社は見つからず、李俊影も見つからない。〕

[23] 伤病员也发现了吴成德，一下子围了过来，七嘴八舌地问：“吴政委，咱们还能不能冲出去？”（《报刊精选》1994年）〔傷病者たちは呉成徳を見つけると、一気に取り囲み、口々に尋ねた。「呉政治委員、私たちはまだ出撃できますか？」〕

[22]は張超がどこかの町という範囲の中のありとあらゆる場所で尋ねまわったことを述べている。[23]は傷病者たちが呉成徳を取り囲んでいるという状況である。その「傷病者たち」という範囲において、大勢の口から“問”という同一の事態が発生しているのである。

このタイプに関しても、よく似た意味を具えながら、述語・連用用法を持たないものがいくつか存在する。“四面八方”“古今中外”“千家万户”がそれである。まず、“四面八方”については「方向」を表す語であり、実例を見ても“从〔～から〕”“向〔～へ〕”などの目的語とし

て用いられることが非常に多い。“大街小巷”のような「場所」は行為との関係が一義的に決まりやすいため、連用修飾語として用いられればそれが「動作行為の発生場所」を表すと容易に理解できるのに対し、「方向」には「起点方向」と「着点方向」があり、行為との関係が一義的に決まりにくい。このことが統語的振る舞いに影響している可能性が考えられる。“古今中外”については、「普遍的」という意味では④の各用例と共通しているものの、表す時空間のスケールがあまりにも大きすぎるために、それ全体を観察範囲とする動作行為が想定しにくいのだという原因が考えられる。ただし、主語用法の中に、連用修飾語に非常に近い意味を表すものが存在していることは指摘しておきたい。

[24] 芦荟原产自非洲，多肉质，生命力非常强。古今中外都非常重视芦荟的多用途。

(《WTO 与中国》) [アロエはアフリカ原産の多肉植物で、生命力が非常に強い。【古今東西では／(人々は)古今東西にわたって】アロエの多用途を非常に重視していた。]

[24]ではほかに主語となる名詞句が存在しないため、“古今中外”を主語と見なすほかないが、意味的には実質上「範囲」を表していると言うことは可能であろう。

“千家万户”は“家家户户”と実質的にはほとんど同義でありながら、連用用法が観察されない語である。これについては、“家家户户”との機能分担が原因の1つとして考えられる。具体的には“千家万户”が主に目的語として用いられることが多いのに対し、“家家户户”は述語の前の位置に置かれることが多い。先の“古今中外”もそうであったように、汎説を表す成語が単独で述語前の位置に置かれた場合、主語か連用修飾語かの判別が難しくなることがある。

[25] 记者走访一些瓜农后了解到，过去，农民几乎家家户户都积农家肥。(《新华社2001年2月份新闻报道》) [記者はいくつかの瓜農家を訪ねて、かつては、農民たちはほとんど各家々で農家肥料を溜めていたことを知った。]

[25]は文頭に主語として“农民”が生起していることから(しかも副詞“几乎”によって“农民”と“家家户户”が隔てられてもいる)、“家家户户”の連用用法と認定したものである。しかし、これを二重主語文と捉える可能性も完全には排除しきれないだろう。いずれにせよ、“千家万户”と“家家户户”は意味的にはほとんど違いがなくても、述語の前で用いられやすいか後ろで用いられやすいかによって、連用用法の成否に違いが生じているのである。

⑤ある範囲内における複数地点での観察結果が同一であることを表すタイプ。

これは先の④のタイプとよく似ているが、前者が「普遍的広がり」の面を強調していたのに対して、こちらは「同一である」ことに着眼するという点で異なっている。“天经地义”“大同小异”“一模一样”“异口同声”にこの種の用例が観察される。述語用法の場合、「同じ」と判断された対象が主語に立つ。連用用法の場合、被修飾語となる後方の述語が観察結果を表す。

[26] 征用土地时要附带安排劳动力, 企业选择年轻力壮者天经地义。(《报刊精选》1994年)〔土地の徴発の際は付随して労働力を手配しなければならず、企業が若く活力のあるものを選ぶのは当然の理である。〕

[27] 没错, 没错, 你是院长的娃。那眉, 那眼, 还有鼻梁儿, 和你娘一模一样。(《人民日报》1994年)〔間違いない、あなたは院長の娘だ。その眉、その目、それに鼻筋、あなたのお母さんとそっくりだ。〕⁹⁾

[28] 同样的情形, 不是直到解放前夕还在全国许多地方大同小异地存在着吗? (《读书》)〔同様の状況は、解放前夜まで全国の多くの地域でほとんど同じように存在していたんじゃないのか?〕

[26]は企業が若くて元気のある者を使いたがるのが、世界中のどこにでも共通する当然の理であることを示しており、[27]では聞き手と院長の外見を1点1点見比べながら、どの部分についても「そっくり」という判断を下しているのである。また、[28]ではある状況が全国各地で同じように存在していたことを述べている。なお、本稿第1節冒頭で紹介した[1]“西装革履”の用例は、この⑤の意味で理解できる。要するに、王教授の全身——頭のとっぺんから足の先まで——が“西装”“革履”に代表されるような「パリッと身なり」という1つの状態に包まれていることを表している。

さて、以上見た5つの意味タイプは結局のところ全て、ある特定の領域における様態・事物・事象等の遍満分布という状況を表しているとまとめることが可能である。どんな領域に何が存在するのか、あるいはその状況のどの側面に着眼するのか、といった点でそれぞれに差異があるものの、いずれも領域と遍満する存在物の関係が基礎となっている点は、①から⑤の全てに共通する。例えば、①②は〈動作行為〉に何らかの〈態度〉や〈手段・方法〉が伴うことを表すものであるが、対偶形式が表す汎説の意味も手伝って、動作行為がおこなわれる間じゅう、そうした〈態度〉等が継続的に満遍なく観察されるという意味になることが多い。即ち、時間軸上に1つのまとまりを成す〈動作行為〉という領域において、〈態度〉〈手段・方法〉が遍満分布しているということになる。③はある〈類〉や〈集合〉を領域として、そこに大量かつ多様な〈個体〉が満ち溢れていることを表すものである。④⑤はいずれも何らかの〈場〉において同一の〈特性〉が遍満分布していることを表す。④はある特性がその中の観察点の1つ1つに満遍なく行きわたっていることを強調し、⑤はほぼ全ての観察点に均質的に同一の性質が見られることを強調する。このように、対偶形式をとる名詞性成語の述語・連用用法は、ある領域における様態・事物・事象の遍満分布を基礎とした表現であると理解することができる。

対偶形式をとりながら述語・連用用法を持たない成語は、端的に言えば、遍満分布の状況を想定しにくいために、そうした用法が生じ得ないのだと推測される。ここまで言及していなかったものとしては後は“暴风骤雨”“来龙去脉”“亲朋好友”“千钧一发”“美中不足”がある。“美中不足”については次節に譲るとして、まず“暴风骤雨”について見てみると、例えばあ

る〈場所〉における〈荒天〉の存在という事態は十分に想定しうるものであるはずだが、実際にはごく僅かしか述語用法は観察されない。“暴风骤雨”には「荒天」という本来の意味に加え、比喩的に「大荒れの状況」という意味を表す場合もあるが、このような名詞としての多義性が統語的振る舞いの拡張を阻んでいる可能性が考えられる。“来龙去脉”は「来し方と行く末、およびその間の経緯」を表す語であるが、この語の場合は内部に含まれる1つ1つの成員の個別性ないし是非均質性のほうに重点が置かれているところに特徴がある。“来龙去脉”と云えば普通は均質な内容ではなくて、むしろ非均質な紆余曲折を語るものであろう。その点において、1つ1つの成員の個性を捨象して全体としての均質な様相に着目する遍満分布の意味とは相容れないのだと思われる⁽¹⁰⁾。“亲朋好友”もこれと同様で、親しい友人はその1人1人の個性が目立ちやすいために、内部均質な集合体として捉えることが難しいのだと考えられる。

残る“千钧一发”は「千鈞の重さを髪一本で釣り上げる（ようなものだ）」という意味を表すもので、対比的な内容を並列した対偶形式ではあっても、そもそも汎説の意味を持たない。この語は[8]が示すように、“～的时刻”“～之际”などの形で時間名詞を連体修飾することが多い。

5. 4 存在文

今回扱った33語の内、“美中不足”だけは唯一、対偶形式を取らないにもかかわらず述語用法を持つ。

[29] 可惜中国格律体的诗词大都译成了分行散文，未免美中不足。《读书》〔残念ながら中国の格律詩は大部分が行を分けた散文に翻訳されており、玉に瑕の感が否めない。〕本稿ではこの“美中不足”について“不足”は名詞であり、それが“美中”の修飾を受けた偏正構造であることを前提に調査を進めてきた。しかし、対偶形式を取らない成語のうち“美中不足”だけが唯一の例外として述語用法を持つという事実はどのように説明すればよいだろうか。ここでは1つの可能性として、当初の前提を見直すことを提案したい。具体的には、“美中不足”を偏正構造ではなく、“美中”を場所、“不足”を存在物とする存在文として解釈してはどうか、という提案である。存在文には通常動詞“有”が必要とされるが、四字成語という厳格な形式的制約が働く環境下であれば、“有”が脱落した“美中不足”が存在表現として成立したとしても不思議はない。事実、范方莲1963:392が夙に指摘するように、中国語では動詞の省略された“場所+存在物”という形式が存在文として成立する場合がある。

もし本稿のこの提案が妥当であるとするならば、“美中不足”は存在文形式を取る成語ということになり、名詞性成語とは認められないことになる。そうすると、少なくとも今回扱った33語のみに限って言えば、述語・連用用法を持つ名詞性成語は、全て対偶形式で汎説の意味を持つものである、という形で一般化できることになる。

6. むすび——敎学への応用の可能性

ここまで本稿では名詞性成語の統語的振る舞いについて考察をおこなってきた。その結果、今回扱った33語に限って言えば（更に存在文形式の“美中不足”を除くすれば）、その中で述語・連用用法を持つ語は、いずれも対偶形式をとり、汎説の意味に基づいた遍満分布の意味によってそうした機能を担っていることが明らかとなった。無論、これはあくまでも今回扱った33語を対象に、CCLコーパスのデータのみに基づいて得られた結論にすぎず、到底名詞性成語全体、ひいては成語全体の特徴を網羅し得るものではない。今後は考察範囲を広げ、その他の名詞性成語についても同様の解釈が可能かどうか検証していかなければならないし、名詞性以外の成語の振る舞いについても学習上の難点を洗い出し、適切な解釈を与えていかなければならない。成語の統語的振る舞いに関する研究は緒に就いたばかりであり、道のりはまだまだ遠いと言わざるを得ない。

それでも現時点で、敎学の場面における成語指導に何か活かせるような点を挙げるとすれば、それは対偶形式の成語の構造的・意味的特徴を十分に学習者に理解させることではないかと思われる。対偶形式の構造的側面については、古川2017:58が指摘するように、語彙学習の際に対を成す類義語ペアや反義語ペア（“千／万”“東／西”など）をセットで覚えさせ、対偶形式への意識付けをおこなうことが効果的であろう。一方、意味的側面に関しては、できるだけ多くの具体例を提示して、対偶形式に汎説という特徴が存在することを明確に意識させるよう努める必要がある。名詞性成語の特殊な振る舞いの多くが、汎説という特徴によって齎されていたことを考えれば、成語の統語的振る舞いの修得には汎説の意味を如何に理解させるかが鍵を握っていると言えるだろう。

〔注〕

- (1) 成語に明確な定義を与えることは容易ではない。現状では“成語是人们习用的、具有历史性和民族性的定型词组；汉语成語以单音节构成成分为主，基本形式为四音节。〔成語は人々が習慣的に使用し、歴史性と民族性を具えた定型フレーズである；中国語の成語は単音節の構成要素を主体とし、4音節を基本形式とする。〕”という馬国凡1978:54の説明が、成語の多面的な特徴をうまく捉えており、最も適当な定義であると考えられる。
- (2) 周国光2002と同一の問題を扱った論考として、ほかに張宝勝2006がある。
- (3) 《現代漢語詞典（第7版）》によれば“不足”には形容詞用法・動詞用法・名詞用法がある。ここではひとまず名詞用法であるとみなす。
- (4) 成語によっては、主語にはならず、ほぼ目的語としてしか用いられないものなども見られるが、「述語」「連用」用法の成否を主たる研究対象とする関係上、本稿では特に断らない限り主語用法と目的語用法を区別せずに一括して扱う。
- (5) 成語が何の助詞も伴わず、単独で「連体」「連用」として振る舞うことは基本的にはできない。したがってここでは、それぞれ“-的”“-地”を伴った上で当該用法を担うものを「連体」「連用」の用例と認定した。
- (6) 「独立」用法とは、成語が前後を逗号（“，”）と逗号、もしくは逗号和句号“。”で囲まれており、

- 単独で1つの節を成すものを指す。このような環境に現れる成語は、逗号を隔てた隣接する節の構成成分として理解できる場合もあるが、そのような解釈が難しい場合も少なくない。そこで、本稿ではこのような環境に現れる成語を一律に「独立」用法として扱った。
- (7) 大河内1997: 9は朱自清の随筆《海阔天空与古今中外》の中に“古今中外”の述語用法が見られることを指摘している。今回のコーパスによる検索結果にそのような用例は観察されなかったが、成語には常にこのような修辭的活用が起こる可能性を持つものなのかもしれない。本稿の分析は、あくまでも今回のコーパス調査の結果に基づいたものであるということをお断りしたい。
 - (8) 比況性連合構造とは、同一音節数、同一構造でかつ意味的にも共通性を持つもの2つを対になるような形にまとめたフレーズ、節、文等の形式を指す。後述の“东家说长，西家道短。”は4音節の節を対にして複文の形でまとめたものである。2音節のフレーズ2つを4字形式にまとめた“胡思乱想”なども比況性連合構造に含まれるが、これらは同時に成語でもある。
 - (9) 2つの対象を比較する場合、両者をざっと概観して全体的な印象として「同じ」と判断することも勿論可能だが、より慎重に比較をするのであれば、両者の様々な側面を順次観察していったうえで、最終的に「同じ」という判断を下すはずである。対偶形式である“一模一样”が表すのは、後者のような意味だと考えるのが妥当であろう。“一模一样”は俗に“一样”をより強調した語だと説明されることがあるが、その本質は複数回の観察に基づいて「どこからどう見ても同じ」と述べるところにあるのだと思われる。
 - (10) 「遍満分布」については池田2015の議論も参照のこと。なお、③の「バリエーションが豊富であること」と遍満分布の「全体としての均質的な様相」の意味は必ずしも矛盾しない。複数の色が混然一体となって全体的な様相を形作っている(カラフルな)チェック模様やマープル模様などを想起されたい。

【参考文献】

- 大河内康憲1997、重畳形式と比況性連合構造、『中国語の諸相』、白帝社
郭春貴・郭久美子・操智2018、『HSK 成語用法』、白帝社
沈国威・紅粉芳惠編2021、『中国語成語ハンドブック』、白水社
池田晋2015、漢語名詞 AABB 式中状態性凸顯的語義條件, *Bulletin of Chinese Linguistics*. vol.8-2
范方蓮1963、存在句, 《中国語文》第5期
古川裕2017、汉语“对举形式”的语法特点及其教学对策, 『現代中国語研究』第19期
马国凡1978、《成語(修訂本)》, 内蒙古人民出版社
陆俭明・马真1985、《現代汉语虚詞散論》, 语文出版社
夏秀文2009、对外汉语教学中成語的认知研究, 《海外華文教育》第3期
张宝胜2006、成語的句法—语义功能——“他这样做是P的”跟“他这样做是P”中P的对立, 《汉语学习》第4期
周国光2002、释“合情合理”与“偏听偏信”的对立, 《语言教学与研究》第1期

【工具書】

- 《国际中文教育中文水平等级标准》, 2021, 教育部中外语言交流合作中心主编, 北京语言大学出版社
《现代汉语词典(第5版)》, 2005, 商务印书馆
《现代汉语词典(第7版)》, 2016, 商务印书馆
《学生实用成語大辞典》, 2021, 开心辞书研究中心编著, 湖南教育出版社

【コーパス】

北京大学中国语言学研究中心语料库(CCLコーパス) http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus/

(いけだ すずむ 中国学科)

2022年11月10日受理